

芥川龍之介「二つの手紙」論

On Akutagawa Ryunosuke's "Futatsu no Tegami"

西田一豊

NISHIDA Kazutoyo

要旨 本論では「二つの手紙」で用いられた方法を明らかにするために、草稿との比較を行い、また語りの分析を行った。これらの作業を通じて「二つの手紙」における語りの特徴を記述することを目的としている。草稿との比較では、語り自身ドッペルゲンガー現象の幻視から、妻によるドッペルゲンガー現象の発現へと変化されていたことが明らかになった。また佐々木の語りの方法が、ドッペルゲンガー現象のまことしやかな報告に付け加えて佐々木は必ずそれを相対化させる「世間」の噂を並置することで、常に言説を二重化させるものであるという見解を得るに至った。こうした方法によって「二つの手紙」は佐々木の語りを絶対化しえない二重化した言説を持つことになるのである。またこの方法が、「二つの手紙」以後のテキスト「地獄変」での語りの方法へと繋がっていることも検証した。

一 「二つの手紙」について

芥川龍之介の「二つの手紙」は大正六年九月、雑誌「黒潮」第二卷第九号に掲載された。この年芥川は「中央公論」に「偷盗」を掲載しているが、「偷盗」が作者によって認められず、何度も改作の意欲をみせながらも、生前は単行本に収められることのなかったこととはよく知られている。「二つの手紙」はそうした「偷盗」の後に発表されたまとまった小説ということになるが、この間、五月には阿蘭陀書房から初めての単行本『羅生門』が刊行され、また六月

かと思われる。が、松岡譲に宛てた七月二六日付けの書簡¹を見れば、「偷盗はとも書き直せ切れないから今年一ぱい延期して九月は新しいものを二つ出さうと思つてゐる」が、例によつて間に合はせ仕事にならなければ好いと思つて心配してゐる」とあり、作家と教師との二足のわらじを履き短い夏休みに原稿執筆に呻吟する当時の芥川の姿が透かし見えもする。

二七日には江口渙と佐藤春夫が中心となり『羅生門』出版記念会が催されたことを考えれば、作者の中に機を新たにする思いもあった

九月に発表されたのは「二つの手紙」と「或日の大石内蔵之助」(「中央公論」第三二年第一〇号)で、後者がしばしば好評を得たのに対して前者の評判は芳しくなかった。同時代評として引かれることの多い江口渙の「九月の小説と戯曲」(「帝国文学」第二三卷第一〇号、大正六年一〇月)を改めて引くと、「或日の大石内蔵之助」については「此一篇は疑もなく芥川君の今迄書いたもの、中で最も

傑れた作であり同時に又今秋の文壇の最も傑れた収穫である」と絶賛する一方で、「二つの手紙」については「芥川君としては蓋し好くない作である。思ひつきとしては一寸面白いものではあるが、その思ひつきに対する作者の態度がしつかりと確定してゐなかつたため充分の効果が現れてゐない。」と失敗作の烙印が押されている。

同じ江口渙の「東京日々新聞」に掲載された「芥川君の作品」(大正六年六月二八日～二九日・七月一日)にある「然し私が特に不満に感じるのは描かれたるその心理が善の場合にも悪の場合にも単なる普通の善又は悪を唯其儘の質に於いて拡大してゐるに過ぎない事である。少しも病的な処没常識的な処のない事で芥川君がとかく作の基調に熱と力とを欠くのは是にも半因するのである。」という一種の注文への応答が「二つの手紙」だったとも考えられるが、江口によってそれは素気なくも否定された形となった。もともと「芥川君の作品」では「病的な処没常識的な処」が描かれているとも思える「忠義」(「黒潮」第二巻第三号、大正六年三月)について「板倉主理の狂乱が性格的であるか境遇的であるか必然であるか偶発であるかが不明なため、作者の倫理的批判の立脚地が薄弱に感ぜられる。」と評しており、作者の「態度」や「立脚地」などが常に問題となる江口の批判態度は、両作品を通じて一貫してはいる。

江口によって「一寸は面白い」だけで「効果が現れてゐない」と批判された「二つの手紙」における趣向だが、そのドッペルゲンガーという「病的な」心理ないしは現象は、後年再び芥川のテクストに表出することによって、同時代評とは異なる評価を研究史にもたらしすことになった。例えば海老井英次氏は「ドッペルゲンガーの陥穽——精神病理学的研究の必要性——」において「二重身」という問題に、

「個性」という近代芸術家にとつての神話の終焉を告げるゆゆしき事態」を読み取り、それが「歯車」において形象化されたとしてゐる。同様に西村早百合氏はドッペルゲンガーに「人間存在の不可解さに対する戦慄」を見、それが後年の芥川テクストへと「共鳴」しており、ゆえに「二つの手紙」には「芥川文芸を貫く核心」が認められると読む。一作品に使用された趣向と作家の思想性との相違はより慎重な手続きが必要なことは言うまでもないが、ことドッペルゲンガーに関して言えば、芥川自身のしばしばの言及から、「作者」という読解格子の有効性は充分検証に値するだろう。

もちろん芥川テクストにおいて主要な問題系を作っている典拠の存在は、「作者」という読解格子にある種の相対性を持ち込むことにもなるだろう。「二つの手紙」に関しては、既に森鷗外『諸国物語』(大正四年一月、国民文庫刊行会)に収められたシュニツラー「アンドレアス・タアマイエルが遺書」との類似が指摘されてきた。また近年では今野喜和人によって「二つの手紙」中、典拠不明とされてきた箇所がクロウ夫人の『自然の夜の側面』からの引用であることが証された⁶⁾。また渡邊正彦氏は芥川の「椒図志異」に「二つの手紙」で採用されたドッペルゲンガー出現場面と同様のモチーフが見出せるとしている。作家に沿つてまとめ直せば怪談・奇談に元來興味のある芥川が、いつかの時点で『自然の夜の側面』を読み、それを「アンドレアス・マタイエルが遺書」と同様の形式で小説化を試みたということになる。そこに作家の思想性を読み取るか否かが先の作家論的先行論との相異になる。

またこうした典拠による相対化とは別に時代言説と対照することにより、「二つの手紙」の大正年間における言説布置を探らうとす

る試みもある。一柳廣孝氏は芥川と大正年間における「探偵小説」の言説の関連を追いながら、またドッペルゲンガーの心霊学を通じて得られる解釈コードの合理性から「二つの手紙」を「分身怪談系探偵小説」と位置づける。あるいは「二つの手紙」に見出せる「狂気」の言説と「手紙」という形式が孕み持つ、他者への欲望とその消費形態を同時代言説の中に跡づけながら、読者の「欲望」を炙り出す西山康一氏の試みや、「分身小説」という文化コードの中における芥川テクストの位相を定めようとする渡邊正彦氏の論考も同様の意義を持つものと考えられる。

あるいはドッペルゲンガーの出現を語る「二つの手紙」の語り手佐々木信一郎をめぐる異常／正常の境界に潜伏する権力構造を指摘する畑中理恵氏の、佐々木の「手紙」を紹介する「予」の語りにつ随するある種の政治性の別扱は、研究者自身の分析・解釈態度への警鐘ともなり、「二つの手紙」をめぐる研究言説の細緻化と、同時代評に見た江口の評からは思いもよらなかったテクストをめぐる分析領野の広がりを示している。換言すれば、先に引いた海老井氏が「二つの手紙」における佐々木の一人称独白の揺らぎ、ないしはテクストの空白から導かれる読者の「読み」の幅を指摘し「むしろ読者に期待されているものは当にそうした読みの自由さなのではあるまいか。」と述べたその「読みの自由さ」の制度こそが現在問われていることだとも言えよう。

これら先行する研究言説史を踏まえながら本論において試みようと思うのは、「二つの手紙」と芥川テクストとの系譜学的配置をめぐる問題系である。すでにこうした問題系についても、石割透氏が「或日の大石内蔵之助」と「さまよへる猶太人」とに「二つの手紙」

との「共通の性格」を指摘し、吉本隆明氏が「歴史物から現代物への（乗り継ぎ）の引込路線」として「二つの手紙」を位置づけている。特に吉本氏はその「（乗り継ぎ）」の性格を「（乗り継ぎ）」時代の歴史物と現代物とに共通する内容を、ひと口に言ってみれば異常心理や男女間の不信や疑惑や不安についての強烈的関心であった。極端なばあいには妄想や幻覚への執着であり、また男女の三角関係についての文明的なこだわりであった。」としている。同様に石割氏も「二つの手紙」を「偷盗」では観念的であった作者の女性に対する不信感が、恐らくは体験に根ざしたと想われるうす暗い性格のものに変質し、作者を脅かすに至っている」テクストだとし、「袈裟と盛遠」「地獄変」「開化の殺人」に同種の側面を示唆しながら、これらは「読者にとって甚だ気がかりな一面をもち、芥川の実生活の秘密にたち入りたい誘惑をもかんじさせるのである。」としている。これらの見解は芥川の中期テクストに共通するモチーフを見ることが、あるいは小説への作家の実人生の影響を見ることがどこに何らかの繋がりを指摘しているものである。また「二つの手紙」について言えば、同様にドッペルゲンガーが登場し夫側から妻の「貞操」が問題となる「影」、あるいは一人称独白体の「遺書」という形式で、テクスト中「日記」の引用等類似するテクスト形式を持つ「開化の殺人」との類似が指摘されてきた。男女の三角関係における恋愛心理を扱ったテクストという範疇で見ればさらに多くのモチーフを共通とするテクストが見出せるだろう。しかし、問題は「開化の殺人」で「探偵小説」へと発展する同様の方法が「二つの手紙」でも用いられていること、と同時にそうした方法の下で共通のモチーフが見えると言うことではないだろうか。つまり、仮に作者の

生活にテキストのモチーフとなる原因が見出せるとしても、男女の恋愛心理をめぐる共通のモチーフが常にある種の小説の方法意識とセットで提出されていることは、共通のモチーフという括りではなく方法の共通性として捉え直すことができるのではないかという点である。そこで、まずは「二つの手紙」の方法を典拠である「アンドレアス・タアマイエルが遺書」及び「二つの手紙」草稿と比較し考えてみたい。

二 横滑りする訴え

「二つの手紙」は佐々木信一郎を自称する人間が「警察署長」へ宛てた二通の手紙、一通が自身のドッペルゲンガー体験を詳述しながら警察機構への自身とその家族の保護を訴えるもの、もう一通は妻が行方不明になったことを知らせるものと、それを挟む「予」による語りによって構成されている。テキスト末尾に附された「予」の語りを見ると、「それから、先は、殆ど意味をなさない、哲学じみた事が、長々と書いてある。これは不必要だから、こゝには省く事にした。」とあり、既に多くの指摘があるように「予」に拠る手紙公開における「編集」の意図がうかがえる。この「編集」ないし附言は手紙自体の読みのコード設定、つまりは異常性を明らかにするものとして先行論では指摘されている。例えば畑中氏は「つまり、《予》は最終的にこう指示するのだ。第二の手紙の後半は、《予》や不特定多数の読者たちを含めた「正常者たち」にとって、理解不能な他者の言葉である。ゆえに、公開した彼の言葉についても、冒頭でのめかしておいたように、「正常者」にとつて通常のコード

で意味に変換できるものではない。他者に対する名付けは、他者自身が否定した名において行われるのが至当だろう。つまり、彼は《狂人》なのである。¹⁴」といったように、「予」のこのテキストにおける働きを別括している。こうした指摘は、ドッペルゲンガーの出現を訴える内容である手紙をどう捉えうるかという読者論的視座における「予」の機能を説明するのに充分に有力な指摘となっているだろう。また畑中氏が指摘する¹⁵「第二の手紙」における「人間が如何に知る所の少ないか」という文言が「予」を含めた読者全般の読みを相対化するという点についても正鵠を射た指摘であると考えられる。ドッペルゲンガーを扱ったこのテキストをどのように読むかという問題について言えば、畑中氏を含め例えば海老井氏が指摘するように佐々木がドッペルゲンガーを本当に見たのか、それとも妻が「不貞を働いて」いたのかという、どちらに事象の真実があるのかという点は「むしろ読者に期待されているのは当にそうした読みの自由さなのではあるまいか」という指摘に一応は決着されるものであるうと思える。ただし、そのように考えた時になぜこのテキストは二重三重にも手紙の書き手「佐々木信一郎」の言葉を相対化しようとするのかという問題が残るように思える。というのも、「二つの手紙」の典拠である「アンドレアス・タアマイエルが遺書」にしる、またプレテキスト（「保護願」）にしる両者ともに語り手の死が予定されているのに対して、「二つの手紙」では「佐々木信一郎」は自身のドッペルゲンガーを見たにもかかわらず、その死は周到に避けられているのである。つまり、ドッペルゲンガーの幻視という事象がもたらす目撃者の死という定型的な物語の型がこのテキストではずらされているのである。これは「アンドレアス・タアマイエ

ルが遺書」やプレテクトストでは語り手が自らの死を賭しての妻の弁護を訴えるのに対して、「二つの手紙」では妻の弁護は行うものの「世間」での噂話までも逐一付け加えながら、自らの責任を周到に回避するという行為になってしまっているということである。「二つの手紙」が粹小説であり、また「第二の手紙」での「人間が如何に知る所の少ないか」という文言がもたらす言説の相対化に加え、その手紙そのものもどうやら文面のみを信ずるに足るだけの記述がなされていまいことなる。ここで改めて「アンドレアス・タアマイエルが遺書」の冒頭を見ておこう。¹⁶

小生は如何にしても今日以後生ながらへ居ること難く候。何故と申すに小生生ながらへ居る限りは、世間の人嘲り笑ひ申すべく、誰一人事実の真相を認めくるる者は有之まじく候。假令世間にては何と申し候とも、妻が貞操を守り居たりしことは小生の確信する所に有之、小生は死を以て之を証明する考に候。明らかのように「遺書」の書き手ないし語り手「小生」は、自らの死の代償として妻の潔白を証明しようと試みている。もちろん、そのあまりに急進的行為によって逆に妻への嫌疑を強めてしまう可能性はある。だが、「遺書」としての訴求性が、その理由の如何にかかわらず、少なくとも「小生」の妻を信じようとした態度を読者の印象に残すことになる。同様に「二つの手紙」のプレテクトストも語り手の死によって何かを訴えようとしているように書かれている。¹⁷

自分は 上に引用した実例で 自分が 自分自身の姿を見た
と云ふ事の 如何に有り得べき事実だかを証明し得たと信じて
いる。そこで 自分は これから 自分がさつき経験した事実
を 出来る丈ありのまま 書き加へるつもりである。これは

自分の死後 死因などについて 兎角の噂を立てられるのが
いやだからばかりではない。一つには 後にのこる妻が これ
を読んで 自分の死が 如何に避け難い運命に 支配されてゐ
たかを 知る為である。前にも書いたやうに 自分はどんな死
に方をするかわからない。自殺するか 或は急病に罹るか そ
れは 予 わからない。が兎に角 死ぬと云う事だけは 確で
ある 少くとも 確らしい気がしてゐる しかも それが 思
つたよりは 早く来さうな気さへしてゐる これは さつき
自分自身の姿を見た時に さう思つた。その心もちが 未に自
分を去らない。自分は死ぬ。数日の中に 必 死ぬ。……

「自分」が訴えたかったものは自身のドッペルゲンガーだったのか、それとも完成稿と同様に妻の潔白だったのかは、残された草稿類からは判断が出来ない。それは草稿類では「保護願」とタイトルの附された原稿を含め妻に関する記述が少ないからである。しかし、それでもこのプレテクトストが「アンドレアス・タアマイエルが遺書」を典拠に、語り手の死によって読み手へ真実の訴求を行おうとしていたことは確かである。

しかし完成稿となる「二つの手紙」での佐々木信一郎は自身のドッペルゲンガー幻視のために死に至るといふ言説を採らない。ドッペルゲンガーは「ヒステリカルな素質」を持つ妻に起因していることになり、それゆえに「第二の手紙」では妻が「失踪」してしまふことになる。ここでも迂遠なようだが草稿と比較しておこう。草稿ではドッペルゲンガー幻視者は以下のような結末を持つ。¹⁸

自分が 自分自身の姿を見た―それは 幻覚だと云ふ人があ
るかも 知れない。が さう云つた所で この事実の主観的

実在性は依然として残つてゐる。それが残つてゐる以上はやはり自分も近々に死ぬものと思はなければならぬ。何故かと云ふと、自分自身の姿を見ると云ふ事と死ぬと云ふ事は、自分の知つてゐる限りに於て、十中八九までは大抵相次いで起つてゐるからである。

「十中八九」引き起こされるといふ死について、いささか冷静すぎる記述が印象的なこの箇所は、それでも近いうちに起こる自らの死を観測したものである。「二つの手紙」においてもこうした死を恐れる記述がないわけではない。例えば「さて、私はその夜以来、一種の不安に襲はれはじめました。それは前に掲げました事例通り、ドツベルゲンゲルの出現は、屢々当事者の死を予告するからでございます。」というように書かれている。しかし、「二つの手紙」が草稿と比べ特徴的なのは、いつしかドツベルゲンガーによる自身の死の予感の薄れ、それが妻によって引き起こされたものであるという見解へ変化していることである。手紙の書き手「私」はドツベルゲンガーについて最終的に以下のような断案を下す。

そこで私は、前に掲げた種々の事例を挙げて、如何にドツベルゲンゲルの存在が可能かと云ふ事を、諄々として妻に説いて聞かせました。閣下、妻のようにヒステリカルな素質のある女性には、殊にかう云ふ奇怪な現象が起り易いのでございます。

妻の「素質」によって引き起こされたドツベルゲンガー現象について語る「予」の語り口はやや苦しいものがある。自身のみならず第三者のドツベルゲンガーを引き起こす「事例」を挙げてはみるものの「エツカルハウズは、死ぬ少し前に、自分は他の人間の二重人格を現す能力を持っている、と公言したさうでございます」という

もので、これまでのドツベルゲンガーを幻視したという証言に比べいささか信憑性に乏しい。また第三者のドツベルゲンガーを発現させるためには、発現者の意志の有無が必要であるといい、妻と自分とのドツベルゲンガー出現の原因を次のように説明する。

成程、妻はドツベルゲンゲルを現さうとは、意志しなかつたのに相違ございません。しかし、私の事は始終念頭にあつたのでございませう。或は私とどこかへ一しよに行く事を、望んで居つたかも知れません。これが妻のやうな素質を持つてゐるものに、ドツベルゲンゲルの出現を意志したと、同じやうな結果を齎すと云ふ事は、考へられない事でございますか。少くとも私はさうありさうな事だと存じます。まして、私の妻のやうな事例も、二三外に散見してゐるではございませんか。

「私」こと佐々木信一郎が最終的に判断したドツベルゲンガーの原因とは、右にあるように妻の夫に対する思いとその「素質」であつた。この場合「私」と意図せずしてドツベルゲンガーを発現させた妻は、ドツベルゲンガー現象の被害者ということになる。それゆゑ、彼等は「警察署長」にたいして身の保護と、的はずれな中傷（と佐々木が考える）の取り締まりを要請したのであつた。しかし、子細を見れば、当初自分のものとして考えられていたドツベルゲンガーが妻に起因するものであつたとする佐々木は、草稿にあつた死を賭しての訴えから大きく横滑りをし、自分のみの身の安全を図ろうとしてはいないだろうか。つまりは草稿からの変遷を見ると、この「手紙」は何か作作的な操作が施されているのではないだろうか、という読者側の想像を引き起こすのである。

三 二つの像、二つの言説

これまで佐々木の「手紙」に見え隠れする、そのドッペルゲンガー現象の発現に関する原因のズレを見てきた。それは佐々木自身の、佐々木自身が持つドッペルゲンガーではなく、妻の意図せずして発現したドッペルゲンガーであった。佐々木夫妻はこの時、その責任を免除され、ドッペルゲンガー現象によって引きおこされる「世間」を巻き込んだ喧噪の被害者となる。少なくとも佐々木のドッペルゲンガーに関する記述を信用する限りそう読むことが出来る。しかし、このテクストは、というよりも佐々木の手紙は、自らの奇妙なドッペルゲンガー体験を報告するだけに留まらず、「世間」で口にされている噂話までも報告することで、それによって引きおこされる被害を訴えるだけでなく、佐々木の報告とは別の「物語」ないし言説がこのテクストに沈潜していることを示してもいると考えられる。佐々木のドッペルゲンガー言説に関しては、既に一柳氏によって「二つの手紙」発表時に、ヒステリーとドッペルゲンガーをめぐるなんらかの「合理」的な解釈格子が成立した可能性はある」とされ、また「心霊学・催眠術といった特殊な解釈コードを使用した場合、探偵たる佐々木の主張するドッペルゲンガーの説明は、ある種の論理的説得力をもつことになる」ともされている¹⁹。この点について佐々木のドッペルゲンガーに関する言説を疑う余地はまったくない。佐々木は佐々木なりに「合理」を尽くした説明をしたはずである。さもないれば彼の文面は現行テクスト以上に意味をなさなかつたはずである。しかし、そうした「合理」を持って文面を作っ

ている佐々木が、どういうわけか自分の言説を相対化してしまう記述までも書き込んでいる。すなわちそれは佐々木夫婦をめぐる「世間」の噂である。例えば第一のドッペルゲンガー現象に立ち会った体験を記した後、佐々木はすぐさま次のような文言を付け加える。

閣下、世間は妻が私を愛してゐる事を認めてくれません。それは恐い事でございます。恥づべき事でございます。私としては、私が妻を愛してゐる事を否定されるより、どの位屈辱に値するかわかりません。しかも世間は、一歩進めて、私の妻の貞操をさへ疑ひつゝ、あるのでございます。――

佐々木による「世間」の噂話の報告はこれだけではない。第二のドッペルゲンガー現象を報告するとまたもや佐々木夫婦をめぐる噂話も付け加えるのである。今度は第二のドッペルゲンガー現象の発現したその場に居合わせた友人のエピソードとして「しかし、私の発狂の原因を、私の妻の不品行にあるに至っては、好んで私を侮辱したものと思われます。私は、最近にその友人へ絶交状を送りました。」と報告している。第三のドッペルゲンガー現象に関しても同様で、今度はより重大な事態が佐々木夫婦に訪れていることを報告している。

閣下、私の二重人格が私に現れた、今日までの経過は、大体右のやうなものでございます。私は、それを、妻と私との秘密として、今日まで誰にも洩らしませんでした。しかし今はもう、その時ではございません。世間は公然と、私を嘲り始めました。さうして又、私の妻を憎み始めました。現にこの頃では、妻の不品行を諷した俚謡わらわをうたつて、私の宅の前を通るものさへございませう。私として、どうして、それを黙視する事が出来ませう。

加えて佐々木夫婦の実害が幾つか紹介されていくのだが、こうした佐々木の被害報告が、例えばドッペルゲンガーの佐々木がどこかで罪を犯したというのではなく、きまつて妻の「不品行」に関するものであることはどういうことであろうか、と読者は考えざるを得ない。佐々木の手紙が自身のドッペルゲンガー現象の報告に留まらず、「世間」で噂される妻の「不品行」をも併せて記述すること、さらには佐々木の報告するドッペルゲンガー現象が必ず妻を伴って現れることを考えれば、佐々木の訴える内容よりも「世間」に噂されるのが真実味を持つのではないかと疑われてくる。ここにきて「二つの手紙」は二つ異なる言説圏を持つテキストとして立ち現れてくるのである。

例えば右に述べた二つの言説圏のうち後者に軸をおくとすれば、石割氏が示すように「妻が夫と結婚する以前に既に情人があり、その男と昨年の秋に再会したことで妻の感情に動揺が生じた」と、容易に推察できる」ようにもなり、また更に一步進めて西村氏がその論考の注の中で示したように「ここで例えば、何故二通の手紙を警察署長に宛てたかという問題と合わせて考えてみると、佐々木が自分の妻の不貞を暗に密告しているという推論が成り立つ。」ことにもなりかねない。この場合、佐々木のドッペルゲンガー現象報告はあくまで口実であり、その真意は妻の「不品行」の告発だったということになる。

もちろん、「第二の手紙」で佐々木が示したように「人間が如何に知る所の少ないか」ということを考慮するならば、佐々木夫婦の間に起きた事件の事実がどのようなものだったのかを知ることが出来ない。それはこのテキストが枠の部分を除けば、佐々木一人の独

白であることも起因しているが、それに加えて佐々木の記述が常に相対化し続けているからに他ならない。読者は佐々木のドッペルゲンガー現象報告の言説と、「世間」の噂話の言説との間でその真意を見出し得ないまま揺らぎ続けなければならない。また、ドッペルゲンガー言説と噂話の言説との二重化は、噂話に出て来る佐々木夫妻がドッペルゲンガーで、ドッペルゲンガー言説の被害者として実際の佐々木夫妻がそれぞれ対応するというねじれも、佐々木の報告では生じてしまう。つまりは佐々木の手紙の記述は、周到にいつてよいほど夫妻の間近で起こっている現象に接近できないように配置されているのである。そのため「二つの手紙」を特定のコードで読もうとする意図は脱臼せざるをえず、逆にいえばどのような読みも、「人間が如何に知る所の少ないか」という限定付きで成立することになる。これは、テキストのメタ視点に立てば作者によって用意された方法であると考えることが出来るだろう。それは像を一つに焦点化することの出来ない、あるいは一つの言説にまとめることのできない二重化の方法と言い得るだろう。

それゆえに、例えば妻の「不品行」が実際に行われていたとの想定で、このテキストを佐々木による妻の告発書であると考え、また幻視すると自身の死を招くというドッペルゲンガーが妻によって引き起こされたものであると佐々木自身が記述した時に、「第二の手紙」に記述してある「世間は無辜(むこ)の人を殺しました。」という記述が、俄に佐々木自身による妻の殺害を匂わせることになったとしても、それはほとんど意味をなさないのである。「互いに愛し合つて居」た妻の突然の「失踪」に対して、自宅で待つということをせず何から逃げるかのように「私は今日限り、当区に居住する事を止め

るつもりだ」と佐々木によって宣言されたとしても、その隠されているように読める真意を探ろうとすることは、これまで述べてきた理由によってやはり意味を持たない。

作者芥川自身について言えば、江口渙によって「思ひつきに對する作者の態度がしつかりと確定してゐなかつたため充分の効果が現れてゐない」と裁断されたこの小説は、およそ一年後の大正七年七月に「開化の殺人」（「中央公論」）として再びリライトされることになる。「開化の殺人」では「二つの手紙」で採用されたドッペルゲンガーないしは言説の二重化の方法は棄てられ、ドクトル北島義一郎による想い人を救出するための殺人の告白となつてゐる。そこでは北島自身である「予」とその心理に巣くう「不可解な怪物」という分裂現象が、ドッペルゲンガーの何らかの余韻を残してはいるが、テキストそのものは金満家「満村恭平」殺害にしろ自らの偽善の矯正としての自死にしろ、北島自身の心理変遷として物語は読むことが出来る。「二つの手紙」にあつた自ら語る言説を、その言説自体が相対化するというあの方法はここでは採られていない。

では、芥川はこの言説の二重化という方法を以後採用しなかつたのであろうか。ここで想起されるのは「地獄変」（「大阪毎日新聞」大正七年五月一日〜二十二日）である。よく知られているように「地獄変」には芥川自身がその解説を行った、小島政二郎宛ての三通の葉書が残されている（大正七年六月十八日）。そこにおいて芥川は「地獄変」の語りを次のように語つていた。²²

然し「あの小説の中の説明」になると私にも云ひ分がありま
す と云ふのはあのナレエションでは二つの説明が互いにか
み合つてゐて それが表と裏になつてゐるのです その一つは日

向の説明でそれはあなたが例に挙げた中の多くです もう一つは陰の説明でそれは大殿と良秀の娘との間の關係を恋愛ではないと否定して行く（その実それを肯定してゆく）説明です この二つのナレエションを組み上げる上に於てお互いにアクテユエトし合う性質のものだからどつちも差し抜きがつきません芥川がここで「表と裏」のナレーションと言つてゐるものが、「二つの手紙」における言説の二重化という方法である。佐々木の記述する妻をめぐる言説は正に「否定して行く（その実それを肯定してゆく）説明」であつた。つまりは「二つの手紙」で採られた方法は「地獄変」へと受け継がれることになつたのである。その一例として例えば次のような場面を挙げることが出来る。²³

かやうな御意で、娘はその時、紅の袴を御褒美に頂きました。所がこの袴を又見やう見真似に、猿が恭しく押頂きましたので、大殿様の御機嫌は、一入よろしかつたさうでございます。でございますから、大殿様が良秀の娘を御鼻肩ひなかになつたのは、全くこの猿を可愛がつた、孝行恩愛の情を御賞美なすつたので、決して世間で兎や角申しますやうに、色を御好みになつた訳ではございません。尤もかやうな噂の立ちました起りも、無理のない所がございますが、それは又後になつて、ゆつくり御話し致します。こゝでは唯大殿様が、如何に美しいにした所で、絵師風情の娘などに、想ひを御懸けになる方ではないと云ふ事を、申し上げて置けば、よろしうございます。

ここで大殿が娘への褒美が、語り手によつてあくまで「孝行恩愛の情」に對してであると強調されながらも、同時に大殿の「色好み」を噂する「世間」の言説を紹介している。もちろん、後者は語り手

によって「否定」されてはいるが、大殿をめぐる言説が、語り手とは別にもう一つ存在していることが明示されているのである。この叙述は「二つの手紙」の佐々木の記述の仕方と同一であることは言うまでもないだろう。すなわち「二つの手紙」というテキストは、そのドッペルゲンガーに事寄せた言説の二重化という方法によって特徴づけられ、この方法は後の「地獄変」の語りの方法へと応用されたのである。芥川にとって大きな作品になるはずであった「偷盗」〔中央公論〕大正六年四月号、及び七月号の挫折の後、初期から中期へと向かうその結節点において小品ともいえる「二つの手紙」は後のテキスト群に少なからぬ影響を及ぼしたといえるのである。

四 結

芥川の中期のテキスト群が、しばしば男女の恋愛における心理描写に重きを置いていたことはよく知られている。それも多くが三角関係を描いたものであり、そこにおける心理ドラマが中心となっている。ただし未完に終わった「偷盗」も少なからず、こうした要素は持っていた。しかし男女の三角関係における心理描写を、平安時代を舞台とした群衆活劇によって成立させようとした所に、この小説の未完に終わった理由が隠されていたのではなからうか。というのも芥川がその後にとった方法は、登場人物の動きを少なくした上で、そこに生起する心理の起伏に重きをおくものだと考えられるからである。特にそれが小説における男女の心理的葛藤において有効に機能したことは言うまでもないであろう。そしてそのターニングポイントとして「二つの手紙」における方法上の試みは、その後の

芥川テキストの系譜を考える時、小さくない意味を持っているだろうと思われる。

本論文ではこうした方法を明らかにするために、典拠となった「アンドレアス・タアマイエルが遺書」と残されている草稿との比較をそれぞれ行い、語り手佐々木のドッペルゲンガー現象の語り口が変化したことをみた。具体的にそれは自身のドッペルゲンガー現象の幻視から、妻によるドッペルゲンガー現象の発現へと変化させることで、ドッペルゲンガー現象に付随するとされる死を忌避し、自らを安全圏へと囲い込む語りであることが明らかとなった。また「アンドレアス・タアマイエルが遺書」ないし草稿類で顕著であった、死を賭しての訴えが「二つの手紙」では薄くなり、語り手佐々木の記述方法の作為的特徴が浮かび上がった。さらに佐々木の語りの方が、常に言説を二重化させるものであることも併せて検証した。ドッペルゲンガー現象のまことしやかな報告に付け加えて佐々木は必ずそれを相対化させる「世間」の噂を並置していた。例えば妻と自分とのドッペルゲンガー現象を幻視した後に、「世間」で噂される妻の「不品行」の噂に悩まされるといふ具合にそれは記述されていた。こうした方法によって「二つの手紙」は佐々木の語りを絶対化しえない二重化した言説を持つことになるのであった。それは佐々木の意図したものであるかどうかは「人間が如何に知る所の少ないか」という文言が一定の効果を持つ以上明確にすることはできないが、佐々木の記述する人物の二重化を意味するドッペルゲンガーと、二つの言説によって読者を幻視させる語りの方法がアナロジカルな関係として構成されていたといえるだろう。またこうした方法が、以後のテキストにおいて、全く同様に見ることが出来、そ

これは芥川自身によっても解説されるところのものであった。それは具体的には「地獄変」での語りの方法ということになる。

しかしなぜ芥川が男女の恋愛心理を中心に据えたテキスト群をその中期に量産したのかという作家論的疑問は解消することはできない。いくらかその要因を伝記に求めることは出来るかも知れないが、これにはより慎重な手続きが必要なはずである。ただそうした心理を剔抉するに際して、「二つの手紙」に見たような心理を二重三重に巧緻化させる方法によって描出しようとした意図があったことは確かである。そうした心理の真相を究明するために「二つの手紙」「開化の殺人」では探偵小説に擬した趣向が採られもしていたのである。もちろんこうした方法は後に探偵そのものを読者に見立てた話の「筋」のない小説へと夢想されるに至るだろうが、そこには作家の文芸思想と相まって語りの方法をめぐる問題意識が揺曳していたことは間違いない。特にこれでこれまで芥川の芸術至上主義の表れであると評価されてきた「地獄変」が、その方法のルーツを「二つの手紙」に持っていたということは、今後「地獄変」を検証するに際して考慮しておくべき点であるように思える。ごく簡単にこの点について述べるならば、「地獄変」とは大殿と良秀との芸術観ないし人生観の衝突とするよりもむしろ、娘を中心に据えた大殿をめぐる言説と良秀をめぐる言説との、二つの言説の相剋が語られていたのではないだろうか。「二つの手紙」から発展する「地獄変」の語りの分析は今後の課題としたい。

また本論で示したように「二つの手紙」を一つの起点として、「開化の殺人」「地獄変」をその方法的ないしは同様のモチーフを持ったテキスト群として捉えることができるとするならば、芥川テクス

トの系譜的配置が明らかになるようにも考えられる。つまりは「開化の殺人」がその後「開化もの」へと発展する契機として存在し、さらには芥川の「保吉もの」を含めた現代小説を視野に収めることのできるテキストであるということを考えれば、「二つの手紙」に示された方法は中期から後期へと繋がる芥川文学の一つの階となり得たと考えられるだろう。また「地獄変」での語りの方法が、その先に「藪の中」（「新潮」大正十一年一月号）を用意したとすれば充分に検証すべき今後の課題となるだろう。加えて本論では不十分となった大正年間における芥川の布置を同時代作家と比較することで、その方法的特徴を記述することも、また芥川テクストの方法的特徴を同時代言説のなかに求める作業も本論でなしえなかった課題として今後検証して行く必要があると考えられる。

注

- (1) 引用は『芥川龍之介全集』第十八巻（一九九七年四月、岩波書店）に拠った。
- (2) 引用は『芥川龍之介研究資料集成』第一巻（一九九三年十月、日本図書センター）に拠った。
- (3) 「ドッペルゲンガーの陥穽―精神病理学的研究の必要性―」（『二つの手紙』「影」（『国文学』一九九六年四月号）。
- (4) 「芥川龍之介「二つの手紙」の意義―Doppelgängerを巡って」（『日本文学研究』第三七巻第三号、一九八五年十月）。
- (5) 小堀桂一郎「諸国物語と芥川―「アンドレアス・タアマイエ」が遺書―」（『二つの手紙』（『国文学』一九七〇年七月号）等）にその指摘を見ることが出来る。
- (6) 「芥川龍之介「二つの手紙」の世界―クロウ夫人『自然の夜の側面』の寄与」（『人文論集』第四十八巻第二号、一九九八年一月）。
- (7) 「藪の中」における〈現実の分身化〉―西欧文学との比較による新しい読み」（『国文学』一九九六年四月号）。
- (8) 「さまよえるドッペルゲンガー―芥川龍之介「二つの手紙」と探偵小説」

- (所収、吉田司雄編著『探偵小説と日本近代』、二〇〇四年三月、青弓社)。
- (9) 「(狂気)とスキャンダルリズム―芥川龍之介「二つの手紙」における手紙公開形式の意味」(『芥川龍之介研究年誌』第一号、二〇〇七年三月)。
- (10) 『近代文学の分身像』(一九九九年二月、角川書店)。
- (11) 「読者の席を考える―芥川龍之介「二つの手紙」と関わるために」(『九州日文』第一号、二〇〇二月八月)。
- (12) 「芥川龍之介―中期作品の位相(1)「さまよへる猶太人」「二つの手紙」―或日の大石内蔵之助」をめぐって」(『駒沢短大国文』第十六号、一九八六年三月)。
- (13) 「芥川龍之介の虚と実」(『国文学』一九七七年五月号)。
- (14) 注(11)に同じ。
- (15) 注(11)に同じ。
- (16) 引用は『鷗外全集』第三卷(一九七二年一月、岩波書店)に拠った。また原文中に附してあるルビは煩雑を避けるために省略した。
- (17) 引用は『芥川龍之介全集』第二十一卷(一九九七年一月、岩波書店)に拠った。
- (18) 引用は注(17)に同じ。
- (19) 注(8)に同じ。
- (20) 注(4)に同じ。
- (21) この点に関しては拙稿「芥川龍之介「開化の殺人」論」(『千葉大学人文社会科学研究』第二十一号、二〇一〇年九月)において論じている。
- (22) 引用は『芥川龍之介全集』第十八卷(一九九七年四月、岩波書店)に拠った。また便宜的に二つに分かれている文面を並立させている。
- (23) 引用は『芥川龍之介全集』第三卷(一九九六年一月、岩波書店)に拠った。

*本文中、「二つの手紙」の引用は全て『芥川龍之介全集』第二卷(一九九五年十二月、岩波書店)に拠っている。